

残りの雪 下巻

立原正秋



残りの雪

下 卷

立 原 正 秋

新潮社版

のこ
残りの雪 (下巻)

ゆき
定価 750円



発行 昭和49年4月25日

8刷 昭和50年6月10日

著者 立原正秋 (たちばらまさあき)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71ノ振替東京4-808

電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 新宿加藤製本

© 1974, Masaaki Tachihara, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◇目次

葦刈	208
枯葉	191
侘助	166
意馬心猿	152
越後	130
昼の月	115
春の水	83
雑草の花	67
しらうめ	32
冬の日	5

装
画
田
中
基
美

残
り
の
雪
(下
巻)

冬の 日

十二月なかばの日曜日の正午、工藤保之は先週の日曜日と同じく四谷駅で藤井愛子と待ちあわせ、麴町のマンションに行った。かつて自分が棲んでいた家を情事の場所に使うなど、工藤にしても考えてもいなかったことだった。愛子と二人きりで逢えるのは日曜日の昼間しかなかった。はじめは連れこみホテルに入るつもりでいたのである。ところがどうしてもそこに入れなかった。ホテルの手前で足が前方に進まなかったのである。場所は渋谷で先々週の日曜日だった。

「とてもだめだ」

工藤はその日愛子を振りかえって呟くと、二人で渋谷駅に戻った。そして、どうしようか、と考えているうちに、財布に入っている麴町のマンションの鍵をおもいだしたのである。その鍵を使ったのは、里子が克男を産むとき鎌倉に戻っていたときだった。期間はほぼ二カ月で、その間、工藤は、鎌倉に行つて泊ったこともあったが、とにかく鍵の生活をしたのだった。それくらい鍵は財布にいついてしまったのである。不思議なもので、麴町を出て新宿で千枝と棲みだしてから、しばしば財布から小銭をだして苮を買ったりしながら、鍵には気づかなかつた。気づかなかつたというより、鍵は財布のなかで抵抗を感じさせない物体になっていたのである。

おかしいこともあるものだ、と考へながらその日工藤は愛子を麴町につれて行つた。この日二

人は、細心の注意をはらったつもりだった。使ったコップはもとに戻しておき、浴室も愛子がきれいにした。ただ蒲団のシートだけは、このつぎにここを利用する予定で蒲団のあいだにはさんでおいただのである。苺の吸殻は愛子が紙にくるんで廊下のダスターに投げこんだ。だから完全なはずだった。まさか里子がコップの位置のずれに気づくとは考えてもいなかった。里子はコップの位置のずれから蒲団をしらべ浴室をしらべたのであった。

つぎの日曜日にも利用した。そして今日は三度目だった。愛子は渋谷で買ったというサンドイッチをかかえていた。

なかに入って最初に目についたのは食卓の上に灰皿で押えてある里子の手紙だった。工藤はそれを読んでひどく慌てた。いまにも里子がここに現れるんではないかと思った。

「やはりここはまずいわよ。でも、どうしてわかったのかしら」
と愛子も慌てた。

「とにかくここから出よう」

二人は部屋にももの二分といなかった。手紙をそのままにし、二人は部屋から出た。そしてマンションを出てくると、四谷駅に戻った。工藤ははじめな感情になっていた。手紙に書いてあった、逃げまわる、という表現が灼きつくように残っていた。たしかに俺は逃げまわっている……。千枝の目をぬすんで愛子と逢っているうちはなにもかもを忘れたが、里子の手紙で、あらためて自分が迷路に入りこんでしまったのを知った。

しかし愛子とこのまま別れるわけにはいかなかった。新宿にいた頃、街をあるきながら目にとめた連れこみホテルが何軒かあったのを思い出した。あそこへ行こう……。なんども歩いた道だったので場所はよく憶えていた。そこは地下鉄の御苑前駅からちかいところだった。工藤は考

えをきめると愛子をうながし、タクシーをつかまえようと通りのちかくにでた。

「どこへいらっしゃるの？」

愛子が不安そうにきいた。工藤は、もとの新宿の店のちかくにホテルがあつたことをほそそと話した。

やがてタクシーがつかまつた。

新宿通りをまっすぐ走って行き、御苑前で降り、そこから二人は歩いた。

「僕はこんなことは初めてだから、どうも照れくさいが、思いきって入るから、うしろからついてきてくれないか」

「目をつぶって入るわ」

二人はまるで二十歳そこそこの若者のような会話を交しながら歩いた。

しかし工藤は、最初に心のなかで予定していたホテルの前を通りすぎてしまった。そのホテルの前に人が二人立っていたのである。つぎのホテルもやりすごした。やはり近くを人が歩いていたのである。これではしようがないな、と思ったとき、予定していなかったホテルの小さな看板が目にとびこんできた。それは目だたない看板だった。あの看板の下に行ったら、そのままずっと入ってしまおう……。

そしてこれは予定通りに運んだ。五十年輩の女が出てきて、二階に案内してくれた。女はガラストープをつけると、いまお茶を持ってきますから、といって去ったが、間もなく魔法壘と菓子を出て行った。急須と茶碗は部屋にそなえつけてあった。どうぞごゆっくり、と言いのこして女のべてあった。

場所がちがったことと里子の手紙を読んでしまったことで、二人ともいつものようにはたのしい感情になれなかった。

やがて二人は、はじめての夜のようにぎごちない動作で一体になった。工藤は里子から千枝から逃げていることで暗い感情になり、愛子は千枝をだましていることで暗い感情になっていた。

「このあいだ、あなたのお母さん、なんとおっしゃったの？」

事後の仮睡からさめたとき愛子がきいた。

「うん、まあ、こういうことになったと僕の方から報告をしただけだ」

工藤が仙台の母に電話をして呼んだのは先週の木曜日だった。母はホテルに一泊してあくる日仙台に帰ったが、会った結果はあまり芳しくなかった。それでこの前の日曜日に愛子に逢ったとき、話すのを避けてきたのだった。

工藤が仙台から母をよんだのは、千枝と別れ愛子といっしょになる相談をするためだった。母は、里子のもとに戻るべきだ、と言った。

「いまからでは、もう、どうにもならないんだよ」

「仲人をしてくれた社長さんにたのんでみたらどうなの。鎌倉に詫びをいれて里子さんのところに戻った方が、おまえのためにはいちばんよいんだがね」

「その時機を通りこしてしまったので、それはできないよ」

「いまいる人と別れるというのはいいけど、そんな母ひとり娘ひとりの娘をもらってどうするつもりなの。お母さんは反対ですよ」

「いちど会ってくればわかるが、とてもいい子なんだ」

「そりゃいい子かもしれないが、おまえがなにを考えているのか、あたしにはさっぱりわからないんですよ。克男をどうするつもりなの。一流大学を出て一流会社に入りながら、なぜ急にそんな分別のつかない男になってしまったの。お父さんや昭夫の前ではずいぶんおまえを庇^{かば}ってきたけど、また別の女といっしょになるなど、いったいどういうつもりなの。里子さんの方だって、そういうつまでも待つてはくれませんよ。一時の迷いだった、と詫^わびをいれれば済むことじゃないの」

これでは話にならないな、と工藤はそのとき絶望的な感情になった。愛子といっしょになるには金が必要だった。母からその金をひきだすつもりだったのである。

あくる日の朝母は、詫^わびをいれて里子のところに戻るべきだ、と言いのこして仙台に帰ってしまった。千枝には、母がきている、と言って上野に出迎えに行き、帰るときも上野に送りに行ったが、ここにはいらっしやらないんでしょうね、と千枝はあきらめているらしかった。

「あなたのお母さん、あなたが奥さんのところから出て千枝さんといっしょにいるのをご存じなんでしょう」

愛子がきいた。

「それは知っている」

「こんどはその千枝さんと別れてあたしといっしょになる、と言って、お母さん承知するかしら」

「そんなことはどうだっていいさ。僕達の気持次第で、親など介入してくれなくともいいだろう」

「もし、あなたさえよかったら、あたしの家にいらしてくださいだっていいのよ。もう母には話してあるんですから」

「いよいよとなったらそうするかもしれない」

しかし工藤は気が重かった。里子とのあいだをそのままにしてあるのに、愛子といっしょになるためには、千枝とのあいだも清算しなければならなかった。母に言われたように、俺は本当に分別のつかない男になってしまったかもしれない……。

工藤と愛子が新宿ですごしていた頃、千枝は街に買物に出ていた。ここところ日曜日になると工藤は森岡ガラス店に将棋をさしに出かけるので、千枝は工藤を送りだしてからまた睡り、いつも三時すぎに街に買物に出るのであった。競輪に行かれるよりはましだ、と思い、工藤が小遣錢を持って出て行くのを千枝はだまってみていた。工藤は賭将棋をやっていると聞いていた。競輪で一万円持つて行かれるより賭将棋で三千円持つて行かれた方が千枝にしてみれば無難だった。

買物といっても夕食の菜だった。近くの店で肉と魚と野菜類をととのえ、家に帰る途中、戸坂くんじゃないか、と千枝は横あいから声をかけられた。電機器具店の前だった。たちどまるより先にその声におほえがあった。かつて勤めていた田村製作所の上司の三堀だった。会社で最初にかかわりあった男は亀岡という部長だった。二十二歳から二十五歳の春までだった。そして二年おいてかかわりあったのが三堀だった。亀岡くんと同額でいいかね、と最初の夜言われたので、千枝は三堀をいちばんよく憶えていた。亀岡、三堀、そして取引会社の佐賀とたらいまわしにされた過去を、千枝が忘れるはずがなかった。

「あら、部長さんじゃないですか」

三堀と手がぎれたのは、三堀が外国駐在になった三十歳の春だったことを千枝ははっきり憶えていた。そして一年おいて取引会社の佐賀の世話になったが、千枝にいろいろなことを教えてくれたのはこの三堀だった。

「この辺にいるのか」

三堀は千枝の買物籠を見ながらきいた。

「はい、この近くです。部長さんはいつ外国からお帰りで……」

「つい最近だ。取締役になってね。しかし、なつかしいねえ」

三堀は灰色のフラノのズボンに茶色の上衣を着ており、いかにも重役の散歩姿といった雰囲気だった。

「おすすめはこの辺ですか？」

「となりの中根町だ。きみは結婚してこの辺にいるわけか」

「はい……」

それ以上は話せなかった。

「そうかい。ちょっとお茶でものまないか」

「あたし、いそぎますので、これで失礼します」

千枝は古傷を掘りおこされたかたちになり、三堀に一礼して家の方に向った。途中で気がつき、別の道を辿り、遠まわりして家に戻ったが、目黒も棲みにくくなってきた、といった思いが湧いてきた。三堀と手が切れて五年経っているのに、小肥りの三堀は五年前とかわっていなかった。三堀にあとをつけられたわけではなかったのに、遠まわりして戻り、錠をおろして店の椅子に掛けると、ほっと息をした。男達にたらいまわしにされた過去が疎ましかった。

疎ましいとはいえ、それもまた自分にとっては愛すべき過去だった。工藤といっしょになったときには、工藤を愛することで過去を浄化できると考えていた。しかし振りかえってみると、過去をひきずって歩いている自分が見えるだけだった。二つ年下の工藤は、千枝に、浄化できる原動力といったものを与えてくれなかった。こちらがいくら粉ごなになっても工藤は煮えきらない

で、まるでどぶからガスがぶつぶつ湧いているように、いつまでも現状を維持していた。

近くにいた以上、三堀とはまた顔があうだろう……こちらがいくら身を隠しても避けて通れることではないだろう、それよりも、三堀が会社で杉浦健夫をつかまえ、あの女に会ったよ、といえば、すべてはあかるみに出てしまおうだろう……。

工藤が帰ってきたのは五時すぎだった。

千枝は工藤のために魚を焼き夕食の支度をした。昼間自分の過去にめぐりあったことで千枝は工藤にやさしくなっていた。

工藤は工藤で、やさしさが久しぶりに戻ってきた千枝に、いくらかやましさを感じていた。愛子との将来は漠としていた。千枝と同じようなかたちになるのではないか、といった危惧がどこかにあった。愛子もスナックをやりたいと言っていたのである。高校を出て十八歳のときから会社につとめ、七年間の給料とボーナスの大半を貯金してあるという話だった。ヘヒロセ〆ほどの店なら出せないこともない、と言っていた。

「賭将棋はどうだったの」

千枝が皿をならべながらきいた。

「敗けたよ」

工藤はあわてて答えるとコップを持ちあげ酒をのんだ。こここのところ森岡には会っていないかった。

「ねえ、あなた、この頃、愛子ちゃん、すこしおかしいとは思わないこと？」

「おかしいって、なにがだ？」

工藤は内心びっくりしながらきかえした。

「男ができたんじゃないかしら」

「知らんな」

「急にいろいろがにじみでてきたのよ」

「そうかなあ」

「女のあたしが気づいているのに、男のあなたが気づかないなんて、あなた、すこしおかしいわよ」

「おかしいって、なにがだ？」

「いろいろが出てきた娘は、男がすぐ目をとめるものなのよ」

そうだろうか、と工藤は昼間の愛子の軀をおもいかえしてみた。すんなりとしてしなやかな軀だった。肉のにおいがしない軀だった。千枝はいったん開いてしまふと開きつ放しの軀だったが、愛子の軀はひっそりと息づいていた。いろいろなどより、ひっそり息づいているのが工藤には気にいっていた。しかし、千枝に気づかれる前に千枝のところから出て行かねば、なにもかもぶちこわしになるかもしれない、と工藤は考えた。

千枝の危惧したことが、月曜日の昼、田村製作所の廊下でおきた。杉浦健夫が地階の食堂に昼食をとりに行くため廊下に出てエレベーターの方に歩いていたら、向うの廊下から三堀常務取締役がこっちに歩いてきた。エレベーターの前で顔があい、杉浦が挨拶したら、昼飯か、ときかれた。

「はい。地下の食堂です」

「よかったら僕につきあわんか」

「よろしいんですか」

「かまわん」

常務につれて行かれたのは、ビルを出て五分ほどのところにある鰻屋^{うなぎや}だった。

「いや、なに、珍しい人にあつたのでね……」

三堀常務は鰻を注文すると、苺をつけてから、前日戸坂千枝に会った話をした。

「へえ、都立大学の駅前ですか」

「結婚したとか言っていたが、会社をやめたのはいつだね」

「この春ですよ。常務は、朝永商店の娘さんをもらった工藤くんをおぼえていらっしやいますか」

「ああ、おぼえているよ。そういえば工藤くんに会わないね」

「戸坂くんは工藤くんと駈落したのですよ」

杉浦健夫は委細をごく簡単に話した。

「そいつは知らなかったな。しかし世の中って不思議なものだねえ。戸坂くんには、男を迷わすなにかがあるんだね。そうすると、いまでもあの辺でスナックをやっているわけだ」

「そうだと思います」

「遊ぶにはいい女だが、伴侶にできる女ではないよ。しかし工藤くんもよくそこまで迷いこんだものだね」

そして昼食をとりながら、杉浦はくわしいことを話した。

「あの辺のスナックやバーを歩けばすぐ見つかるよ。新宿のように広くないからね」話をきき終えた三堀が言った。

「さっそく朝永さんに知らせておきます」

「しかし工藤くんはもったいないねえ。はじめがつかなかったのかな」